

まずは中の人たちが一番かつこいいとか、一番過

してて楽しいと思える仕掛け作りを

語り手 小山夕莉乃（高校九期生 会社員） 聞き手 鮎内梨琴

*

ー（小山さんが働いていらつしやる飲食店の梅ジュースをいただいて）
わあ、ありがとうございます。すごい。めっちゃおしゃれ。（小山さん
の会社では、大阪・阿倍野で「THE MARKET」という複合施設を運営され
ている。）

（梅ジュースを）混ぜて！ 梅のシロップも自分たちで作っていて。
手作りやからすごい美味しい。

ー（混ぜながら）混ぜてないですか。これ（笑）。

もつと混ぜていいと思う！ ふふふ。

ーお忙しい中、お時間取っていただいて、ありがとうございます。
こちらこそありがとうございます。

*

今につながるリツモリ時代の思い出

ーありがとうございます。今日は、どんな高校生活やったかとか、リツ
モリで過ごしていた時と今の繋がりを主にお聞きたいなって思っ
て。

わかりました。リツモリでの経験は、今でも生きてるなと思って。
大きく二つに絞るとすると、一つはやっぱりアメリカンフットボール
（以後、アメフト）部での活動で。

私、中学校は地元でテニスしてたんやけど、スポーツは好きやけどそ
んなに得意じゃなくて。でも高校でも「何かしらスポーツに関わり続け
たいな」と思ってマネージャーを選んで。いろんなスポーツがある中で
アメフトにしたのは、たまたま誘ってくれたから、が、きっかけなんや
けど。体験入部の時に「日本一を目指して頑張ってる」っていうのにす
ごいこう（感銘を受けて）、目標高く頑張ってるのがかつこいいな、何
かサポートできたらいいなと思って入って。

（高校）三年間すごい充実して楽しくって。私中学の時とか、自分の
ことしか考えてないような、どうしようもない人間やって（笑）。ふふ
ふふ。ほんまに人のために動くとか絶対できひんタイプやったから、誰
かのために何かするとか、ちよつと先のことを考えて動くとか。「チーム
として（自分の）役割を見つけて動く」みたいなことは、アメフト部の
マネージャー時代にすごい学ばせてもらったな、と思ってて。

だから結構、その考えとか動き方とか、もちろん大学時代にも生きて
るし（大学でもアメフト部のマネージャーを続けられていた）、社会人
になって仕事するときもほぼ同じような感覚で動いてる感じがあるか
ら。今も（世間一般で見ると）小さな会社で働いてて。会社としては社
長入れて三人の（少人数のチーム）。

ー三人！

そう。やから、部活でいうキャプテンと、会社でいう社長がこう、旗
を振って、前に進んでくれる人。その周り全般をサポートしていく、み
たいな感覚で今も働いてるから。

ーすごい。ずっと。

そう。そういう意味としては、先頭に立って旗を振る人がいて、それ
を全力でサポートしてチームとして達成していく、みたいな気持ちとか

取り組み方とかは、全部高校時代に学んだっていう感覚が今もちゃんとあります。

*

で、さっき言った（今に活かしているリツモリでの経験の）もう一つ目のことを挙げるとすると…。まあ割合でいうと、アメフトの方が正直七割、八割ぐらい。でも、もう一個何か挙げるとしたら、高校一年生の時に台湾に行くプログラム…あった？ ないかな、もうないかもしれんけど。

—台湾…。でもなんか（あったかもしれないです）。

全員が行くんじゃなくて、行きたい人だけ手あげて、お金払って行くみたいな、二週間の交換プログラム。私、それが初めて海外に行った経験やって。すごい簡単に言うのと視野が広がったというか、今まで見たこともないような人たちと喋って、ほぼ喋れない英語で頑張ってプレゼンを作って、みたいな経験がすごい面白かったから。海外研修はもう行った？

—まだです。二月です。

私はシカゴに行かせてもらえたんやけど。リツモリの間にそうやって二回海外行かしてもらえる経験があったから、すごい海外に興味持つようになつて。高校三年生の時にグローバルコースにいたんやけど、グローバル、今もある？

—今、（自分を指差しながら）グローバルコースです。

あ、ほんま！ 私たちの代、初めてグローバルコースができた年やつて。だから、結構先生たちも手探りな感じやったけど。そういう（台湾での）経験があったから、海外に興味も持って（三年生に進級する際）グローバルコースにも行つたし。大学も国際関係学部に行つてた。高校

の終わりから大学の初めぐらいにかけては、海外で働くこととか、国際協力的なことに興味があつてそういう道に進んで。結局、今はまちづくりとか、都市計画とか、そういう風な仕事についたから、ちよつとジャンルは違うけど。

—台湾の交流プログラム、なんか面白そう、つて（その環境に飛び込んで）行つた感じですか。

そう。

—すごい！

なんかこう、あ、こんなあるんやって、興味本位で行つて、みたいな。あはは。何もわかつてなかったけど、とりあえず、今、多分もういはらへんな、今川先生っていう人が一年生の時の担任やって。で、その人が英語の先生で、絶対いいから行つてみ！ みたいな風に言ってくれて。

—あーすごい。留学かつこいいなーって、ずっと思つてて。

私、弟もリツモリやねん。めっちゃ理系でフィンランド行つてた。

—私もフィンランド行きたいんです。理系じゃないのに。

あ、そうなん（笑）。私の時無かった。他に何があつたかな、

—カンボジアとか。

あつた、あつた！ なんか五、六個くらいあるやんな。あれや、スポーツの大学行つてた。それもアメリカ、サンフランシスコや。スポーツコースで、やからアメフト部の人とかよく行つて。めっちゃ向こうで筋トレしてた。プロの野球観戦とかして帰ってくる。ははは。

—ええー！ 向こうでも筋トレ（笑）。はは、めっちゃ面白そう。部員もいっぱい居りますよね。名前とか覚えられるんですか。

お母さんも言つてた（笑）。それは大丈夫。

—ふふふ。なんか一番、部活してて印象に残ってることとかありますか。

うーん。一つのことには熱中してみんなで頑張るのはすごい良い経験やっとなつて思ってる。もちろん八反さん（アメフト部顧問の先生）もいたし、橋詰さんっていう外部のコーチも来てくれてて、そういうプロもいたから、明確な指示をもらいながら、点を取りに行くポジションではない立場やからこそ、何で（どうやって）チームに貢献できるのか、

（常日頃）考えてた。もう一個は……。八反先生とかは、スタッフは立場が下みたいな風に思ってたはらへんくつて。「スタッフも選手と同じぐらい大事なチームの一員」みたいな風にずっと言ってくれてて、それはすごい今も覚えてる。厳しいことを言われるときも多いけど、でもそれだけいろんなことを期待してくれてたし。そう、平等に扱って育ててくれて、すごい感謝してます。

＊

今のお仕事について

じゃあ、今の話に繋がってもいい？
—はい、もちろんです。

都市計画とかまちづくりに関する、めっちゃ平たく言うとかンサルディングをする会社……。コンサルタントってアドバイスしたりするような会社で働いてるんやけど。

大学二回生の時にたまたま留学の途中で（大学時代、カナダへ留学されていた）、アメリカのポートランドっていう街に遊びに行つて。カナダからバスで行ける距離のアメリカやつて。すごいまちづくりで有名なまちやけど、そういうことは全く知らずに遊びに行つて、すごい居心地が良くて。アメフトから学んだことは計り知れないけど、当時アメ

フトのことしか見てなさすぎて視野が狭かったし、強いチームやからこそ（閉じた世界の中にいるような）雰囲気はどこかあったから、ポートランドに行つて解放された感じがあつて。全く知らへん人同士でも、こう、心地よく喋れたりとか、お店の人と話しながら買い物するとか、日本ではこれまでしたことがなくて。ちょっとした街中にある家具の置き方とか、そういう工夫（空間デザイン）で知らない人同士でも仲良くなれたりするんや、みたいなことに結構感動して、自分としては。そういう意味で、なんかめっちゃおつきくやけど、街に対して興味を持ち出して、日本でもそういう風に、なんか心地よく過ごせるなみたいになってくれる人がいたらいいなって、ざっくりその時感じて。で、日本に戻ってから、就活のタイミングで街づくりに関われる仕事を探して、今の仕事に繋がってる。

—すごい。

そういう意味でいうと、アメフト部時代に思ってたこととか、海外に興味を持ってたこととか全部繋がってるなと思う。

—うんうん。確かに。留学先で見つけたっていうのがすごいですね。たまたま。そう。なんか、ビビビって。そこからまちに関わるって面白いなって思つて仕事として調べてた。

—まちづくりとかに関わる仕事。なんか、就活に関する知識も何もなくて。だからそれ（今のお仕事は）どうやって探されたのかなと思つて。

あー！ なんか、めっちゃおつきく分けると、ハード系のこと、例えば設計とか工事とか、建築系のこと。もう一個、ソフト系のこと、例えば（建物を）建てたとして誰が使うんやろうとか、どういうお店が入るんやろうとか（を考えること）が大きく分けてあつて。自分も知識なかったから、ネットで調べてる中で、どちらかというとソフト系の方、今

でいうこのアドバイスするような会社であつたりとか、誰かと誰かを繋いで相乗効果を生んで街を良くしていくみたいな、そういう系の会社にたまたま巡り会えて。

―想像ができなさすぎて。すごいなあと思つて。

いやいやいや。私は社会人になって五年も経つてしまふけど、まだまだ何もできひんから。楽しく働いてるだけやけど。

―それが一番ですね。

でも、うん、多分いわゆるサラリーマンみたいな働き方は全然してなくて、ほんまに自由に働かせてもらつてると思う。自治体とか鉄道会社とか市役所とか、そういうところからお仕事もらつて、きつちりと進めてるコンサルのお仕事があるんやけど、それと別で、ここのお店（三井MARET）という飲食店や八百屋などの複合施設）の運営も、会社の大きな（事業の）一つやから、机で考えたりする系のコンサル系のお仕事と、現場系のお仕事と、ダブルであるつていう働き方は、普通の会社ではほんまにないと（思う）。

―確かに。どっちかつてなりがちですよ。

そうそうそう（笑）。でも、どっちもあるつて、やっぱすごい、人の働き方として大切なと思つて。実際、私たちも現場に入つて、パンを焼いたり、アイスも作つたりするんやけど、そういうことをしながら、役所とか鉄道会社との仕事もすることは、体も動かして、現場でお客様ともリアルにコミュニケーション取りながら、きつちりした仕事もするのは、いろんなバリエーションの仕事があつて、すごい面白いなつて思う。

＊

―鉄道会社とお仕事つて何をするんですか？

鉄道会社つて、電車に乗ってもらつて、その運賃が彼らの収益やつたけど、日本全体の人口が減つたり、いろんな地域の過疎化が進む中で、運賃だけではビジネスモデルが成り立たなくなつてきてるつてことに対して、危機感覚えてる。（これまでは）電車がピストン輸送するだけで儲かつてたけど、郊外側に住む人がいなくなつたらもうやばい。拠点（駅があるエリア）だけじゃなくなつて、まち全体を見て魅力的な場所にしないと駅も使われませんよねつていう考え方で、一緒に取り組ませてもらつてる。

―おー。そこでくつついた感じなんですね。

そうそう。とか、観光庁も二〇二四年から、観光のあり方が変わつていくつていうのを発表してはつて。観光地とか、ザ・非日常の場所に遊びに行くことがこれまでの観光やつたけど、一回見て終わるみたいな、心を消費するような楽しみ方つて、ちよつと時代が変わつてきてるよねつていう。じゃあ、新たな旅の形がどうなっていくのかは、遊園地（なぞ非日常の場所）だけじゃなくて、ちゃんと暮らしがある人たちのところに行つて、誰かに会つたりとか、日常らしさを感じられるような場所に足を運ぶつていうのが面白いと思つて。自治体も同じような感じで、自分たちのエリアに対して責任感とか思いがすごいあるから、どうにかまちを良くしていきたいつて常に思つてはる。どっか外からおっきなもの（人気店やショッピングモール）を作つて人を呼ぶんじゃなくつて、まずは地域の人たちが普段の日常を楽しめるような場所にしていきませんかつていうことを伝えて、一緒にやつてる。

―すごい。私もなんかその場所にずつという人と交流できる機会つてないなつて思うし、勝手に商店街とかめっちゃ好きで、昔ながらのまま（続く）関わりがあつたりとかつていうのにすごい惹かれて。

素晴らしい。そうそうそう、私たちの大事にしてる考えとしては、ほんまにまずは「外の人」じゃなくて「中の人」っていうのをいつも大事にして。いくら外から人が来てくれたとしても、中の人がここ（自分が住む地域）を楽しんでないと、多分それってハリボテ状態というか、ほんまは面白くないんやなとか見透かされてしまうから。まずは中の人が、ここのまちが一番かつこいとか、一番過ごしてて楽しいと思えるような仕掛け作りを。それが結構根付いて芽生えていったら、自然と外から人はやってくると思って。こういうちゃんと暮らしが根付いてるところに人が遊びに来るっていうのが心理だとすれば、まずはちゃんと地域内で、日常をちゃんと育むっていうことを頑張った方が、結果近道なんじゃないかな、って思ってます。

―なるほど、確かにその時だけ誘致とかしても、持続的でもないし、って感じ。

そうそうそうそう。

*

「まちおこし」という言葉を使わない理由

―最後一つだけ。小山さんにとって、まちおこしってなんですか。

まちおこしね。私たちの会社では、意外とまちおこしとか、まちの賑わいとか活性化とか、そういう言葉はあんまり使わないようにして。それはなんでかって言うと、地域に暮らしてる人たちって、お祭り騒ぎのような賑わいとかあんまり求めてなくて。そういう派手なことっていうよりは、穏やかな安心できる日常の方が求めているから、地域でお買い物を楽しんだり、ご飯食べに行ったり、音楽聞いたり、畑したりとか、自分が暮らしてるまちで過ごす時間が増えてきたら、おのずと関わる人とか、足を運ぶお店も、普段挨拶する人も増えてくる。そういうこ

とが増えてきたら、心の安心と安全、安寧に繋がるっていうことを会社では大事にして。だから、派手なお祭りとか活性っていうイメージよりも、いかに自分が暮らしてるまちで楽しめるかを地域の人に気づいてもらうっていうか、感じてもらえるように頑張ってる場所があると思います。

―ありがとうございます。

なんか、都市計画とかの分野で有名な、ジェイン・ジェイコブズっていう女の人がいて、その人は地域で過ごす多様な時間が増えれば増えるほど、人は安心できるっていうことを言ってます。例えば、さっき、この辺にいたような人たち（お客さん）は、顔は見たことあるしよく来てくれるけど、名前とかどういいう仕事してるかとかを詳しく知らない。でも、見たら安心するとか、こんなにちがって言える関係性（で、それ）が増えれば増えるほど、人は幸せになるっていうのを言ってます。なんかまた別の本で、グッドライフっていう、ロバート・ウォールズンガーっていう人が書いた本が、去年か一昨年ぐらいに出たんやけど、その人たちは、人生の幸せとは何かっていうのを、八〇年とかにわたって追跡調査してきてたらしくて。

―すごい！

人間の関係性、人間関係が豊かな人ほど、人生が幸せだって言ってる人が多いっていう結論を出してはった。その人間関係っていうのは、こいう、ピラミッド型で考えると、一番上に家族とか友達とか恋人とかがいるとして、下の方の土台となる部分は、さっき言ったみたいな、顔は知ってるけど名前とか何してるかは知らない（関係の）人たち。そういう人たちが多ければ多いほど、この土台が大きくなるから、幸せの土台が大きくなるよねっていうのを大事な考えの一つにして。こういう都心

部で暮らしてても、隣に住んでる人とか、近所付き合いかあんまりなかったりするけど、実はそういう関係とかカフェでよく会うとか、そういう人が多ければ多いほど、人って幸せに繋がってるっていうのを思ってるから。「元気にしていこう！」みたいなまちおこしのイメージっていうよりは、どちらかというとじわじわこう、住んでる人たちが、自分のまちが楽しくなっていくみたいな仕掛けをいかに残せるか、を意識して取り組んでいます。どれだけ衰退してるように見える地域でも、そのまちが大好きすぎて何かしてる人って結構いたりするから、そういう人たちと出会って、その人たちが感じてる気持ちをいかに一般の人に広めていくか、っていうか。（身振り手振りを交えて）こっちで（地域が楽しいという雰囲気）広がってたら、おのずとこっち（一般の人）も感じ出し、なんか面白いことが起こってるなっていうのがじわじわわかっていくから。

—うんうん。

なんかまちづくりって言葉いつできたんかわからへんけど、めっちゃ万能な言葉やなって。何においても言えちゃう言葉やから。私たちも誰か人に話したりする時は、わかりやすく（伝えるために）まちづくり関係のお仕事をしてますっていうことが多いけど、あんまりその「まちづくり」とは思っでなくって。いかに日常を大事にしながら、そのまちの個性を磨いていくかを結構大事にしてる。

—ありがとうございます。確かに、まちづくりって言っても…

ふふ。幅広すぎて。福祉とか教育とか、何に関しても。うん、言えるから。しかも、ね。まちって別に作るものでもない、（既に）あるし。であれば、そのまちが昔から培ってきた歴史とか文化とか、長く続いている老舗の奥行きとかもちろんと守りながら、大切にしながら、新し

いお店も増やしていく。で、エリア全体としての魅力を高めていったら、地域の人も楽しいし、その様子を見て外から人が遊びに来たり、引っ越してきたりとか、そういうことが起きていくんじゃないかなって。—なるほど。ありがとうございます。すいません、最後に…とか言ってみっちゃぶっこんだ感じで。

いやいや。ふふ。（聞き書き二〇年史は）めっちゃ面白い取り組みやと思う。

—今日はお時間とっていただいてありがとうございます。またすぐ連絡します。

全然気負わずなんでも。こういうこと知ってますとか、繋がってますとかでもいいし、言ってもらえたら。

—ありがとうございます。お願いします。

【感想】

立守での経験が今にどう活かしているかを伺う中で、役割を探し行動を起こすなどの日々の努力や、慣れない環境への挑戦が未来に繋がるのだと実感しました。語り手の小山さんのお話や姿勢から、忙しさを言い訳にせず、積極的にチャンスを迎えにいきたいと思いました。何より、未熟な私にもまっすぐ丁寧に対応して下さい、憧れと刺激を受けました。



右：語り手 小山夕莉乃さん

左：聞き手 藪内梨琴

小山さんのように優しく丁寧に人と関わり、前向きに挑戦していきたいです。